

明治時代後半 岐阜地区で歌われた労働歌
『岐阜のあゆみ』からの抜粋

注：『岐阜のあゆみ』は、常呂町の開基百年に賛同する形で、昭和58年1月に岐阜地区住民を対象に発行した冊子で、編集責任者は林不二夫氏。
取り上げた歌は、「明治30年以降、岐阜地区に移住してきた当時、主に娘さんたちが2〜3人で石臼でソバや麦を挽きながら唄った歌とも言われている」と紹介しています。

○辛抱なされ 辛抱はカネよ 臼を見なされ シンはカネ

○臼をひくなら 身を投げこんで かけたタスキの まわるまで

○丸い玉子も 切りよで四角 物は言いよで 角が立つ

○腹は立つかや あなたの腹は マムシ腹かや 恐ろしい

○馬よあそぶよ(注：歩けよ) あよばなぢやす あよばは食わせる 休ませる

○旗は立てども 許しておくれ わごちえので 言ったこと

○娘子じゃない 嫁こそ子なれ 娘他国の ひとつの子よ

○思いこんだに そわせておくれ 神も仏も 親さまに

○天の星ほど 男はあれど 主とさだめる 人はない

○ひとり娘が 妹をつれて 川に流れて やけ死んだ

○唄はたもとに 千百あれど いろのまじらぬ 唄はない

○若い衆さまよ そめきと見える そめきあげます こちからから

○一人息子と 寒菊花は 可愛がられて こまかける